

石川達三

幸福の限界・泥にまみれ

妻とは性生活を伴う女中にすぎないのか？ 戦後
変貌をとげた妻の座を問う「幸福の限界」。結婚生
活に絶望しながら生き抜く女性を描く「泥にまみ
れて」。他に「ろまんの残党」「神坂四郎の犯罪」。

¥950 新潮社版

石川達三
幸福の限界・泥にまみれて

新潮社版

幸福の限界・泥にまみれて

石川達三作品集第五卷

昭和四十七年二月二十五日 発行
昭和五十一年一月十五日 七刷

定価 九五〇円

著者 石川達三

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(03)二六六五一一

編集部(03)二六六五四一一

振替東京四一八〇八番

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

装画 下田義寛

© by Tatsuzo Ishikawa 1972 Tokyo

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

ろまんの残党

5

幸福の限界

93

神坂四郎の犯罪

223

泥にまみれて

299

解題

久保田正文

403

幸福の限界・泥にまみれて

ろまんの
残党

I

創作の仕事は、孤独な魂の戦いだ。作家たちは誰でも、孤独な書斎のなかで自分の姿をながめ、自分の魂を手ざぐりし、そしてそのような孤独を愛する。この孤独こそは、最も豊富なものののだ。机にむかっているあいだが私たちの戦いである。この戦いには味方というものがなくて、自分ひとりだ。そして敵は、無限にひろがるこの社会なのだ。作家たちはこの苦痛な戦いを無上のよろこびとして生きる。あらゆる作品は勝利の結果としてうまれて来る。しかし本当の勝利はなかなか得られない。夫婦のあいだの争いのように、勝ったと思ったところから敗けがはじまる。戦局の破綻はいたるところから追いつまじり、勝利はたちまち敗北にかわる。私たちは再び果てしない孤独の戦いを、姿なき敵に挑まなくてはならない。孤独の感はずますはげしい。

書斎の戦いを切りあげて、休戦喇叭を吹いて、街に出てゆくと、それまでとは打って変って人なつかしくなり、友達を探しまわる。

友だちというものがどんなに有難いものであるかを、一番よく知っているのは作家たちではないだろうか。私たちにとって、小学校の修身で教えられたような、友を選んで交われとか、朱に交われれば赤くなるとか、そんな忠告は甚だ有難くない。酒を飲む友達、友情に篤い友達でありさえすれば誰だっけかまわないのだ。そしてこれら玉石混交の友人たちが、凡そ十六、七年にわたる私の文学修業の仲間だった。なつかしい仲間たち！彼等との交遊は駄弁と酒と嘲弄とに終始したが、その乱暴な無礼な言葉の奥に、どんなに温かい朋友の感情があつたかを思うと、胸があつくなる。こういうことを言ってもいいと思う。一人の作家を育てるのは彼の友人たちなのだ。多くの友人に愛せられ支えられていることによって、作家はその魂を育て、その文学に馥郁たる香りを与えられるもののようである。

こういう意味から言って、同人雑誌には深い意義がある。毎月とぼしい財布から三円か五円かの金を出しあい、時間と金と精力とを浪費して、愚劣な小説を書き愚劣な雑誌を発行しながら、しかもその仕事に耽溺してゆくことの尊い意義があるのだ。私はあの「浪漫文学」の仲間を忘れることができない。一癖ある連中ばかりだった。酒好きで、遊び好きで、仲間にもかって悪態をつくこと

ばかり考えている。手に負えない悪い連中だったが、美しい友情につながっていたものだった。雑誌が経営難で廃刊されてからも十年以上にもなるし、当時の青年作家たちの大部分は他の仕事についているが、あの頃の生活がなつかしいばかりに、今もなお昔の交遊が続いているのだ。センチメンタルな仲間たち、しかしこのようなセンチメントには、四十を過ぎて鬢髪に白毛を見ような今日になっても、なお陶醉し得るものがある、遠く過ぎ去った青春をなつかしむ心とともに。……

篤兵衛については思い出が無数に有る。随分わるいことをしたものだ。この年上の友だちを、私たちは寄つてたかつて虐めていた。ところが篤ちゃんと来たら、癪癪もちのくせに、無類のお人好しで気が弱かった。気が弱いという点から言えば北山義行にしても浅野三郎にしても、朝から晩まで気の利かない毒舌を弄している宮木草雄にしても、みんな気が弱かった。これは不思議なことだった。文芸に志す青年たちはみんな気が弱かった。膨大なる社会と対峙し、変化きわまりなき人生を相手にして、この時代を描き人間を描き出そうとする不逞な野心をもった青年たちが、なぜ誰もかれも気が弱くてお人好しなのであろうか。

「浪漫文学」の仲間でただ一人だけ気の強い男がいた。大橋剣一だった。そして彼は全く小説家となるべき素質をもたなかった。彼は吾々の仲間だったが、彼と私たちとの間には、何よりも大切な（友情）がなかった。親しさがあるだけだった。

木谷篤市を木谷君と呼んだことはほとんど無かった。私たちは篤ちゃんと呼び、宮木草雄は篤兵衛と呼んだ。三十を過ぎていながら、みんなは彼を年下の友達のように思っていた。気の毒な男だった。彼の本質的な欠陥は、あふれるばかりの才気であった。瘦せて、丈がたかく、綺麗な鳶色の眼をしていたが、女よりもひどい撫で肩であった。この肩の形が篤ちゃんの性格を決定していた。彼はその才気を働かせるには是非とも必要な（強烈な意志）というものを、まるっきり持っていなかった。

篤ちゃんの良い声をしていた。酔うて追分けを歌うと、蝦夷の浜辺に寄せる波の音がきこえ、潮の匂いがただようようであった。そんな良い声であったから、若いころに琵琶を習って木谷錦秋という名を貰うほどになったが、こんなものは男子の一生を託するに足らずと考えて、発明に凝った。しかしその発明たるや、社会に文明をもたらすが如くに見えて、その実は繁雑をもたらすものに過ぎなかった。水道の蛇口の改造だとか、インキの乾かな

いインキ瓶だとか、決して詰らない煙管だとか、便利のように見えてその実は不便な厄介な発明であった。新案特許を彼に七つも与えた特許局の方針に、私たちは悪態をついたものだった。

勿論、発明は彼にとって資金の消費以外のものではなかった。そこで彼は三転して文学を志した。篤ちゃんはやろうと思えば何でも一通りはやれる才気をもっていた。それが彼の陋し穽だった。しかし文学は発明と同じように、資金の消費にすぎなかった。彼に全く欠けている（強烈なる意志）が、文学には是非ともなくてはならなかった。

木谷よりも更に惜しむべきものは浅野三郎だった。「浪漫文学」の仲間のうち、北山義行は大学で四年も先輩だったし、作品もすぐれて立派であった。私たちは北山を兄貴分のように思い（一目置いて）居た。酒を飲みながら、唇を歪めて投げつける彼の毒舌に、私たちは何度とまどいさせられたか知れない。北山義行には齒が立たない。

浅野三郎が私のライバルだった。大学の子科のときから浅野と私は机をならべた仲であった。彼は立派な、すぐれた天才をもっていた。「淡紫色の空間」にしても「陸橋の風」にしても「渚と葦の芽」にしても、それか

ら「孫右衛門の話」にしても、矢つぎ早に発表する短編小説はそのたびごとに同人たちの賞賛をうけ、彼に対する評価は確定していた。それなのに、木谷篤市の場合と同じように、浅野は強烈な意志をもたなかった。二十七歳の青年が、老大家のように枯淡な文章で、淡い美しい物語を書いていた。天才というものは、それが本当の輝きを発するためには、燃えていなければならぬ。彼の強烈な意志が、彼の若い情熱が、または瑞々しい肉体が、薪木となつてその才能を燃やさなければならぬ。

浅野三郎の不幸はそこにあった。彼はあまりに早くから、志賀直哉や徳田秋声や宇野浩二の文学にひたつてしまった。青年らしい、形のととのわぬ情熱を懸命に抑圧して、端然と老成した枯淡な文学の境地を、二十七歳にして早くも獲得したのであった。竹村可七郎のような情熱がいつも胸のなかで暴れまわっているという風な青年は、浅野の作品に不満だった。

「うまいと思うんだ、僕はね。うまいけど、何だか僕は面白くないんだ」

それには肉体的な理由もあった。浅野は近眼だったが、眼鏡をかけることが嫌いだった。宮本草雄や私がしきりにすすめて、

「眼鏡をかけることは、君の視野を明るくすると同時に

君の心境をも明るくすることだ。買わなきや駄目だぞ」

幾度となくそういう忠告をしたものだが、彼は眼鏡を
買う金で酒を飲んでしまった。その酒好きが、更に浅野
の心境を怠惰にするものだった。そのうえ、彼はひどい
便秘症だった。元気がなくなり、顔色が悪く、多少の頭
痛もあった。私たちは腹を立てて、

「そんな事をしているから無気力になるんだ。薬を飲め
よ」と言った。すると彼は蓬髪をかきまわしながら、近
眼の光のない眼を向けて弁解するのだった。

「大丈夫だ。もう二、三日たったら出るよ」

私は下剤を買って来て浅野の眼のまゑに突き出した。

「飲め！ 子供じゃあるまいし……」

山路を辿るものが、遅れそうになる仲間を上げましは
げまして峠を越えるように、私たちはこの気の弱い天才
を、このライバルを、いら立たしく責めたものだった。
私たちはお互いに、みんな嫉妬ぶかい「敵」だった。し
かし自分ひとりが先に行こうとはせずに、みんな一緒に
峠を越して、その日の宿に辿りついたかったのだ。この
愛すべき「敵」だけが、私たちの味方だった。

一人前の世間人になってしまうと、誰でもが身のまわ
りに堅い鎧をつけて、他人の干渉を許さない。自分の貧

弱な城のなかに小さな孤独を築いて、他人を決して近づ
けようとしなない。そのような要心ぶかさが、実は内部の
弱さを証明しているのだ。内部にしゃんとした骨格のあ
る動物は、外に鎧を着てはいない。

私たちの放埒な青年期には、誰も鎧などは持っていな
かった。二人も子供のある北山義行にしたって、尾崎清
二郎にしたって、まるで開けっ放しなものだった。自分
だけでは立つ力のない蔓草が互いにからみあって高く伸
びあがってゆくように、私たちは寄りあいからみあって
生きていた。お互いの思想や行動に干渉し、経済状態に
立ち入り、肉体の生理にまで突っこんで注文をつけたり
批判したりした。青年期の皮膚は薄くて、友だちの無遠
慮な侵入を自由に受け容れることができた。いわば、人
間の輪郭がまだ確定していなかった。したがって私たち
はアメーバ類のように自在に形を変え触手を伸ばして、
ひろい社会の感情を手さぐりすることができたのであつ
た。

篤兵衛が一番ひどかった。私たちはどれほど彼を侵害
したか知れない。相手の皮膚に何か一つの弱点を見つけ
ると、私たちはそこから容赦なく侵略を開始する。木谷
はいつもそういう弱点をもっていた。

彼は新宿の裏通りのアパートに住んでいた。もはや青

春という時代は過ぎてしまったが、彼が大人になった事を証明するどんな証拠もなかった。大人であるためには安定した職業があるとか、生涯の生活方針がきまつているとか、家庭や妻子があるとか、何かそういう条件が要るに違いない。しかし木谷篤市にはそのうちのどの条件もなく、ただ年齢が三十二になったというだけであつた。そこに悲劇的な要素があつた。しかし彼の悲劇を私たちはむしろ滑稽なものに感じ、彼に悪態をつく材料にしてしまつた。

小説を書いてみると、彼の性格の欠陥や生活の表裏が偽るすべもなく露出されてしまつた。彼の作中人物はいずれも子供のようにお人好しで繊弱で、小娘のようにロマンティックであつた。その小説はお伽噺のように綺麗ではかないものだった。木谷の悲劇は、木谷の作品のなかにあつた。

宮本草雄が鬚だらけの頭をしゃくくつてこう言つた。

「ねえ篤ちゃん、ダンスホールへ行くのも宜いけどさ！ ダンサーに金を注ぎこむばかりが能じゃないんだよ。時には君、恋愛でもして見ろよ。三十二にもなつて恋愛したことも無いなんて、それで君、よく恋愛小説を書くねえ」

残酷な言葉だった。木谷としては一番触れてもらいた

くない腫物だった。しかし私たちの時代にはこれほど残酷な外科手術が、許されていたのだつた。逃れる術もなく追いつめられて、木谷は少女のように辱しがって笑つた。

「そうだな、僕も一つ恋愛をせんといかんな。そのうち二、三人恋人をこしらえて、銀座あたりをのし歩くとするか」

彼はいつもそういう幻想を描いていた。恋愛をしている自分を空想し、たのしんでいた。しかし恋愛に最も必要な実行力というものを、彼はまるで持たなかつた。

彼は大橋剣一が結婚したときのエピソードを知つていた。大橋は、全身すべてこれ実行力という風な、向う見ずな漁色家である。彼の妻は以前あるビルディングのエレベーター・ガールであつた。或る日大橋は彼女のエレベーターに乗つた。他に人はなくて、二人を乗せた箱は上昇しはじめた。そのとき大橋は突然彼女の肩を抱いて接吻した。女は抵抗しなかつた。箱はたちまち五階六階を素通りし、八階の天井におそろしい勢いでぶつかった。抱きあつた恋人たちは三寸も宙に飛びあがつて床に倒れた。……それから間もなく大橋はこの小柄な可愛らしい娘と同棲し、一年も経つた時には男の子の父になつていた。

「昇りつめた恋というのはお前のことだ！」

しかしこういう強行手段は篤ちゃんに出来ることではなかった。寧ろ羨むべきは尾崎清二郎の場合である。

尾崎はほとんど学歴をもたない努力家であった。ずっと以前には関西の映画館で（活弁）をやっていた。暗いなかで情緒纏綿たる説明をするのが彼の得意の技術であった。ある女が、闇のなかから聞えてくる彼の声に恋をした。彼女は一週二回ずつ一年間もキネマに通いつめて彼の声に聞き惚れていた。それから思い切って楽屋に尾崎を訪ね、映画よりも情緒的にその心情をうち明けた。間もなく尾崎はこの女と結婚して長男好一を得た。

「声は聞えて姿は見えぬというのは尾崎のことだ！」

木谷はこういう女の出現を待つこと久しいものであった。これならば（苦勞なし）だ。しかし待ちに待った女は現われず青春はもはや終りであった。彼の淋しさは宮木草雄の毒舌にあうと、次第にいらだたしいものになって行った。

（思い切ってぶつかって見よう！）それにはなるべく気の弱いやさしそうな娘を選ばなくてはならない。

夕方がくると彼は洋服を着て、恋愛の相手をさがすためにダンスホールへ出かけて行った。彼が洋服をきると、女よりもひどい撫で肩が一層目立って、ひよろひよろに

痩せて見えた。彼が新宿の街を歩いているときには、まるで通行人から逃げまわっているようであった。彼の後姿は風に吹かれて宙にただようているように頼りなかった。宮木草雄はその毒舌をつつしむべきであった。木谷の一切の薄弱さはその肉体から来た必然であり、本質的な悲劇であったのだ。ところが彼は、多少の嘲笑と鞭撻とをまじえて、こう言うのであった。

「君は三十二にもなって、童貞だなんて、辱しくないかい。かたわかも知れんぞ。一ぺん医者に見てもらえよ」

暮れ方の、うす水色に澄んだ空に黄色い三日月が出ていた。すると尾崎清二郎の息子はこう言った。

「お父ちゃん、バナナだよ。ねえ、あれ、バナナだよ」

これは新鮮な感覚だ、と小説家の父は思った。ジャン・コクトーのようにお洒落な、ポール・モーランのように瑞々しい感覚ではないか！ところが子供は腹がへっていたのである。むしろ「飢え」の心理を細描したクヌート・ハムズンの感覚であった。——昼飯が足りなかったのだ。

尾崎は机に頬杖をついて、夕空のバナナを眺めていた。子供は四月から学校へあがる。父は三十一歳の春をむかえた。青春は終わったのだ。

かつて、彼の映画説明に恋情を寄せた妻は、いまでは新宿の酒場に働きに出て、彼のために米と原稿用紙とをもたらししてくれる。彼は情緒纏綿たる映画説明をやめて、今は骨を噛むようなこの貧窮の生活を、洗いざらい小説に書きつくそうと志していた。愛すべき妻は夜更けてから、ひとり机に坐っている孤独な良人の姿を、ふと眼ざめた枕のうえから静かに眺めやり、さて、秋風のようにかすかな歎きを洩らすのであった。

「あなたは、なぜそうまでして、小説を書かなければならないの」

妻から言われるまでもなく、貧窮の責任は彼が負うべきものであった。罪は、小説というものの不思議な魅力にある。トルストイ、スタンダール、モーパッサン、さては隅外、漱石の残したすばらしい文学の魅力が彼の精神に災いして、青春を賭けての身代限りをしてしまったのだ。後悔と未練とが彼の心を二つの方角に引き裂いていた。

彼はようやく八十枚の小説「嵐」を書き終ろうとしていた。この作品がもしも彼の文運をひらく鍵とならないならば、恐らくは最後の小説となるであろう。それから後はどんなつまらない仕事にでもついて、この貧窮から家族を救おうと思っていた。

机のまわりが暗くなって、夕空のバナナが光りはじめた。

「好一、雨戸をしめなさい」

すると貧しさに鍛えられた息子、父の心を扶けるような気の利いた返事をした。

「飯くいいに行くのかい？ 僕きようはうん、いよいようん、なら十銭だからね」

大正年代から昭和へかけて、日本の文学は貧しい青年たちの悲惨な努力によって、受け継がれ育てられてきた。彼等の貧しさのために、多くのすぐれた青年作家たちが、巷の泥に埋もれてしまったのだ。不思議な時代であった。豊かな天才をもち馥郁たる精神をもった多くの青年作家たちが国家からも社会からも、その父や兄からも顧みられることなく、塵芥のように見すてられながら東京の片隅に命をつないでいた。彼等の命をつなぎ、彼等の天才を育てるために、最も大きな理解をあたえ努力をさげした者は、女であった。酒場に働く女給や、舞踏場に働くダンサーであったのだ。そのような個人的な愛情のみが、若き天才を培う美しい土壌であった。いま、中堅作家として、または青年作家として、見事な作品を発表している人たちのほとんど三分の一が、彼等を愛していた女た

ちのかなしい努力によって、ある時代の生活を支えられてきたのだ。そのような多くの犠牲をはらってまでも、創らなければやまない（小説）とは一体何であろうか。昭和の新しい文学は、酒場に働いていた女性に負うところが多い。こんな馬鹿なことがあって宜いものだろうか。日本の文学を受け継ぎ、更にあたらしい文学を創造しようとする若い天才たちが、酒場に群れをなす酔漢どもの（欲情の代償）として手渡されるT-I-Pによって、貴重な生命をささえられなければならなかったのだ。尾崎清二郎もその一人だった。

彼ばかりではない、「浪漫文学」の仲間みんな貧乏だった。竹村可七郎は印刷会社の校正係で、七十五円の月給で伯母と二人の暮しを立てていた。そのころ私は心にもなく実業雑誌に原稿を売って、四十円で暮していた。宮木や浅野や木谷は親の腰かじりで、やはり四、五十円のものだった。肩身のせまい（失業者）であった。しかし独り者の気楽さは、その貧しさを楽しんでさえも居た。ひところ、私は友人と三人であばら家を借りて、自炊生活をやった。何カ月か勘定をとどこおらせたために電灯も瓦斯も止められてしまい、夜は蠟燭で暮した。あの電灯会社の集金人は、小さなあばら家の夜から光を奪ったことによって、どんなに大きな文化的な罪を犯して居

ったか、自分では考えたことはなかったに違いない。世間の虐待に馴れていた私たちもまた、集金人のむごい仕打ちをあたりまえと考えていたのだった。そのかわり、ひそかに屋根に這い上って切られた電線をつなぐことも当りまえと思っていた。盗電工事が成功して急に明るい夜をむかえたこともあった。味噌醬油はおろか、一粒の米もなしに朝をむかえたことも度々であった。私たちは日向の縁に古新聞や古雑誌を持ち出し、欠伸をしながら屑屋が通るのを待っていた。そうして三、四十銭の代価をうけとると、先ず五銭の刻み煙草を一袋買い、一升の米を買い、余りがあると銭湯にはいって、さて帰って来ると垣根の竹を引きぬいて焚物にし、粥を煮るのだった。それから鍋の煮えるのを待つあいだ、台所に胡坐をかいながらフロールを読みチエホフを論じボードレーを語った。そのような生活の貧しさと豊かさとは、何にも増して楽しいものだった。

このような楽しさは、文学青年だけのものだった。尾崎の場合にはそうは行かない。彼の女房と涙垂れ小僧とは（縁なき衆生）であった。彼女等には富が必要であった。私たちは尾崎に関する限り、その私生活を干渉し、その皮膚の隙間から侵入して心臓に匕首を突きさすような、あの皮肉と嘲弄とを、嚴重にさしひかえていた。尾